

研究プロジェクト総合報告
研究プロジェクト論文

学部・学科を越えた英語の学び

— Inter-collegiate Oral Communication Festival 参加に向けた
共同ドラマ制作プロジェクト —

佐伯 林規江

同志社女子大学・学芸学部・国際教養学科・教授

Learning English beyond Faculties and Departments:

A joint drama-production project for the intercollegiate Oral Communication Festival

SAEKI Namie

Department of International Studies, Faculty of Liberal Arts,
Doshisha Women's College of Liberal Arts, Professor

Abstract

This study aims to discuss the significance of crafting and staging an English drama performance as a joint-departmental, project-based approach to studying English as a foreign language at DWCLA. Students from the Department of International Studies and Department of Clinical Pharmacy participated in the project. They created bilingual staging scripts from a famous TV drama “ER,” rehearsed, and eventually performed in the annual intercollegiate Oral Communication Festival (OCF). The author explains the project's process, including the interpretation of authentic texts, an inquiry into current medical and ethical issues, an analysis of the characters, rewriting the script for the stage performance, and rehearsing the scenes. The project's findings and the outcome may provide meaningful insights into the fundamental significance of the inter-departmental English drama courses in DWCLA, possibly contributing to the students' successful acquisition of autonomy, leadership, and basic social-life abilities.

1 はじめに

「本学の教育理念及び Vision 150を活かした共通英語教育開発のための基礎研究」の一環として、教育背景の異なる国際教養学科と医療薬学科の学生が、共に「学修するコミュニティ」

で協働し英語によるドラマ制作に取り組むプロジェクトに挑戦した。活動の成果は、年に1回開催されるオーラル・コミュニケーション・フェスティバルに於いて他大学の大量の聴衆を前に舞台発表した。本稿では、舞台上演までのこの英語ドラマ制作の過程を振り返り、学びの

主体となる学習者と指導・マネジメントの両面から、学部・学科を越えた「学修コミュニティ」の意義と課題について考察する。

2 研究の背景

2.1 語劇と英語（外国語）教育

グローバル化に対応した英語教育の改革が進む昨今、英語教科指導開始時期の低年齢化、大学入試へのスピーキングテストの導入、4技能重視化など、コミュニケーション力向上を促す動きが益々活発になっている。外国語で演じる劇を「語劇」と呼び、ドラマ・パフォーマンスやパブリック・スピーチなど聴衆を意識した演劇活動は、オーラル・コミュニケーション能力を伸ばす手法として、多くの大学の英語教育や外国語教育に取り入れられている。ロールプレイや即興劇（Improvisation）は学習者の持つ語彙力と問題解決力を駆使して目的を達成するタスク型の比較的小規模な活動として実践されることが多い。Drama in Education（DIE）は、役を「演じる」ことを通して倫理・社会問題を擬似的に体験したり、文学作品の解釈を深めようとする「参加型学習媒体」（小林、2010）である。情報提示型のプレゼンテーションや朗読を通して聴衆と喜びや感動を共有する目的で行うオーラル・パフォーマンスは、聴衆により正確かつ効果的に情報やことばを伝えることが必須となるため、発音や表現法に創意工夫しリハーサルと振り返りを繰り返す過程は、コミュニケーション重視型の共同学習（cooperative learning）に有効的な素材となる。それぞれの手法で成果発表に至るまでの一連の活動が、学習者に到達すべき目標を明確に意識させるため、他者のパフォーマンスをよりクリティカルに鑑賞したり自身の表現を客観的に見つめ直す自律学修が促される。発表の成功は、学習者の達成感と自己肯定感を高め、さらなる学習動機に繋がることも期待されている。

クラス内で演劇活動の成果を発表する場合は、通常同じ授業で練習してきた受講生や指導者が聴衆になるが、成果発表の場を敢えて教室外に

設け、よりパブリックな場で不特定多数の聴衆を前に舞台発表を行うことで、共に協働する仲間との団結力と相互の学修のニーズはより高まる。日本の大学生に英語劇の指導を実践したVia（1976）は、大勢の聴衆を前に発表することの意義を以下のように述べている。“They (students) can become involved in the situation and discover the how and why of the language... If it is announced at the beginning of the course that the play will be performed on a given date, the students will have a goal to reach. Students with a definite, interesting goal progress faster and further.” (p.6)

ほぼ初対面の大勢の聴衆に一度きりの本番で理解や共感を促すためには、言語的にも非言語的にもより「伝える」こと、つまりコミュニケーションの最たる目的を意識的に扱い練習する点で聴衆を意識した舞台発表を外国語教育に取り入れることは理に適った手法である。

2.2 同志社女子大学の英語教育と語劇

同志社女子大学においても、英語による「語劇」は伝統的に実績があり、英語英文学科のシェイクスピア・プロダクションや短期大学部（2000年に改組）英米語科のミュージカル・プロダクションは舞台発表に至るまでの過程での様々な主体的学びを重視した演劇活動の実例である。

さらに、筆者は、2017年度秋学期に「学芸学部ジョイント・プログラム」に於いて、ミュージカル『The Sound of Music』より「Do-Re-Mi」の舞台上演を率いた。この授業は、本学学芸学部の音楽学科、情報メディア学科（現、メディア創造学科）、国際教養学科の3学科の受講生40名が英語ミュージカル上演という1つの目標に向かって共同研究と協働制作に取り組む学科横断型科目で、12月の最終成果発表では、学内外の聴衆に対して約400人収容可能な頌啓館ホールで15分の公演を2回（2日）上演した。上演にいたる学修過程では、英語音声表現（発声、発音）、歌唱、身体表現（ダンス振付）、演

技指導、ステージデザイン、音響・照明効果、広報、ドキュメンテーションなど、様々なサブ・プロジェクトを学生自らが発足し舞台制作に取り組んだ。各学科の教職員がそれぞれの専門分野を活かした指導やアドバイスを適宜行い、受講生を対象にした事後アンケートの質的分析からは動機付けや自己肯定感の高まりが読み取れた。また、学部・学科横断型プロジェクト学修（PBL）を実施する場合の学内諸関係部署や学科間の連携についてのいくつかの課題と改善点が見えた。（佐伯、2018）今回の共同ドラマ制作プロジェクトは、授業の主旨や構成メンバーの学科は異なるが、2017年度の学芸学部ジョイント・プログラムの実践と省察（佐伯、2018）から得られたノウハウが活かされている点も多い。

2.3 JACET オーラル・コミュニケーション・フェスティバル（OCF）

大学英語教育学会（以下、JACET）のオーラル・コミュニケーション研究会では、英語による音声身体表現や演劇活動を通したプレゼンテーション能力や発話能力の向上を探求することを目的に研究活動やワークショップを実践し

ており、OCFはその活動の1つである。研究会のメンバーである教員が各大学で指導する大学生（留学生を含む）が年に一度集合し、日頃の学習成果を約100名の聴衆を前に舞台上で発表し、互いに鑑賞し合う。教員が他校の発表に講評を述べ、さらに大会の終わりに全参加者が集い意見交換やフィードバック通して学びと交流を深める英語パフォーマンス大会である。開始から終了までを1日で開催し、司会及び発表の全てが英語で進行される。会場は研究会メンバーの所属大学のホールや大教室もしくは公共施設を1日借用して開催される。参考までに、歴代のOCF開催会場は表1の通りである。

OCFでは、学びの過程で習得するコミュニケーション能力の向上や情意的・認知的成長を重視し、敢えてコンテストのように順位や受賞を競わず、互いの成果を評価し合うことを目的として「フェスティバル」という形態をとっている。発表ジャンルは様々で、発表人数、及びメディア機器の利用についてまとめたものを図1に示す。

各大学の発表は、必ず直後に他大学の教員から講評が述べられ、また、OCFに参加する学生は他大学の各発表に対して聴衆としてコメン

表1 OCF開催会場（1996-2019）

	開催年度	会場		開催年度	会場
第1回	1996年度	獨協大学	第13回	2008年度	オリンピック記念センター
第2回	1997年度	獨協大学	第14回	2009年度	文教大学
第3回	1998年度	明海大学	第15回	2010年度	文教大学
第4回	1999年度	津田塾大学	第16回	2011年度	文教大学
第5回	2000年度	オリンピック記念センター*	第17回	2012年度	日本大学
第6回	2001年度	オリンピック記念センター	第18回	2013年度	常葉大学
第7回	2002年度	獨協大学	第19回	2014年度	文教大学
第8回	2003年度	オリンピック記念センター	第20回	2015年度	南山大学
第9回	2004年度	青山学院大学	第21回	2016年度	神戸市外国語大学
第10回	2005年度	青山学院大学	第22回	2017年度	名古屋外国語大学
第11回	2006年度	神戸研究学園都市ユニティ	第23回	2018年度	文教大学
第12回	2007年度	南山大学	第24回	2019年度	同志社女子大学

*正式名称 オリンピック記念青少年総合センター

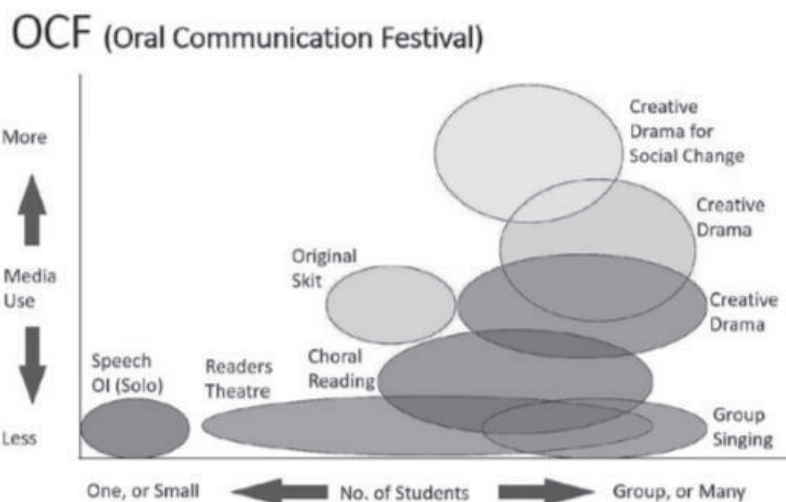


図1 OCF 発表内容、人数、メディア利用の概要（ムーディ、浅野、野村。2019. p.252.）

トシートに感想を記入し提出する。そのコメントと録画データは、後日担当教員を通して学生に共有され、各大学で「振り返り」を行う。教員は指導の経緯、発表の位置付けと狙いなどをまとめ、それらは毎年報告書として発行される。

同志社女子大学の学生は、筆者がこれまで英語英文学科、英米語科、国際教養学科で担当した授業のPBLとして、1996年の第1回OCFから参加し、他大学の学生との交流を通じた学びを続けてきた。第24回となる2019年度は、本学がホスト校となり、企画から他大学の招聘、大会運営、司会進行まで、全てを本学国際教養学科の4年次筆者ゼミ生が主導した。2019年度のOCF開催概要は以下の通りである。

- ・日時：2019年12月14日（土）13：00－17：00（17：15－19：00 懇親会）
- ・場所：同志社女子大学京田辺キャンパス ラーニング・コモンズ イベントスペース
- ・参加校：文教大学、南山大学、神戸市外国語大学、名古屋外国語大学、鳥取環境大学、仙台青葉学院短期大学、東京工芸大学、同志社女子大学（教員含め約100名）

本学は、ホスト校として大会の企画・運営に携わるとともに、発表校としても参加し、本「学修するコミュニティ」のプロジェクトとして、国際教養学科3年次生と医療薬学科生が協働し英語ドラマの制作を行い、このOCFで上演した。前者のOCFの企画・運営・司会進行の詳細については、本稿では報告に含めない。

3 「学修するコミュニティ」 共同英語ドラマ制作と上演

3.1 参加者

国際教養学科生12名と医療薬学科生5名の計17名。国際教養学科生は、3年次秋学期必修の「卒業研究Ⅰ/Senior SeminarⅠ」いわゆるゼミの筆者クラス生で、表2に示すシラバス(抜粋)に従い本ドラマ制作に参加した。医療薬学科生は、医療薬学科の高橋玲教授（本研究プロジェクトメンバー）の「英語サロン」（高橋、2021）に2018年度参加した学生と同教授の授業を受講している学生の中から希望者を募り、自発的にこのドラマ・プロジェクトに参加した医療薬学科生の5名で、学年の内訳は、1年次生2名、3年次生1名、5年次生1名であった。

表2 「卒業研究 I / Senior Seminar I」 シラバス (抜粋)

<p>Course Theme 授業テーマ Creating, crafting, and hosting an intercollegiate oral communication event</p>
<p>Course Summary 授業の概要 This is a project-based performance course, which provides students with the basic principles and performance techniques of oral presentation and leadership as a foundation for holding the intercollegiate project, the JACET Oral Communication Festival 2019. We will host this annual event at DWC-Kyotanabe campus on December 14, 2019. The participants of this course will plan, organize, and host this event by performing on stage collaborating with the seniors and students of other departments in DWC. The purpose is to allow students to enjoy using and testing the knowledge and skills they have developed in class within the project-based activity. It is a lot of fun, and students will learn so much more from really participating and observing others and reviewing judges' comments than they could ever learn just from readings and discussion.</p>
<p>Course Objectives 授業目標 Upon successful completion of this course, students will be able to:</p> <ol style="list-style-type: none"> (1) develop understanding and appreciation of the intellectual, emotional, and aesthetic content of crafting and hosting an intercollegiate project (2) develop skills in vocal variation and body language necessary for effective performance, and learn how to listen, analyze, and respond to performances critically, (3) determine a theme for graduation thesis (in the senior year), (4) participate in one theatrical performance/presentation on stage (the intercollegiate Oral Communication Festival in December) as a team with one performance. The purpose is to allow students to enjoy using and testing the skills they have developed in class within the ultimate crucible of learning, "the real world," as a global citizen.

3.2 発表までの学生の取り組み

教育背景も学年も異なる2学科の学生が全員揃って作業やリハーサルで協働する時間とは、火曜1講時「Senior Seminar I / 卒業研究 I」の授業時間を充当した。プロジェクトの活動期間は、9月授業開始時から12月14日 OCF 当日までとした。

ただし、医療薬学科の1年次生は同時間帯に学科の授業が重なっていたため、物理的に集まって共同作業をする時間は、授業時間の終盤頃から2講時開始直前までの時間帯と火曜の全員の授業が終了する4講時終了後を充当した。後述するが、学科や学年を異にする学生同士がプロジェクト・ベースで共同・協働学習する場合、全員が集まれる時間帯を捻出することは非常に

困難であり、そのためにもカリキュラム上で、「同じ科目を受講する」形態を維持することでのみ活動時間は確保困難なのが現状である。

学生の取り組みのプロセスは、授業計画に照らして表3に示す。本番までの少ない時間で舞台発表できるまでの成果を成し遂げるためには、週1回90分の授業時間のみでは到底目標とする上演には及ばず、授業時間外での自発的な事前事後学修以外にも、放課後のグループ・ワークの確保が必須となるのが常である。特に、12月に入ってから発表直前の通し稽古(リハーサル)は、発表会場となるラーニング・コモンズ・イベントスペースでの練習を18時以降に実施し、そこで教員(高橋、佐伯)も指導にあたった。

表3 学生の取り組みのプロセス

週	活動の内容	備考
第1週	顔合わせ、OCF ガイダンス	9月末
第2週	発表題材選定、英語台本制作開始 (DVD 視聴、助言)	TV ドラマ→舞台へ
第3週	パイリンガル台本制作開始、MC・ナレーション追加	10月中旬
第4週	配役・スタッフ決定、ブロッキング、台本の補正修正	随時台本補正
第5週	パイリンガル台本補正・修正、動作確認、語彙確認	11月
第6週	パイリンガル台本補正・修正、動作確認、語彙確認	課外・自主作業
第7週	動作・発音練習、大小道具・効果音・スクリーン制作	高橋助言・指導随時
第8週	リハーサル (試行錯誤)、個別発音指導、台本修正	佐伯助言・指導随時
第9週	リハーサル (通し稽古)、大小道具・衣装、テクリハ	12月
第10週	リハーサル (通し稽古)、テクリハ、	連日課外リハ
第11週	12月14日 (土) OCF 本番、他校発表へのコメント	
第12週	録画とコメントによる振り返り、(台本最終仕上げ)	

3.3 共同ドラマ制作の題材の選定：

『ER 救急救命室』

『ER 救急救命室』は、1994年から2009年までアメリカ合衆国のNBCで放送されたテレビドラマシリーズで、救急救命室 (Emergency Room, 略称: ER) で医療に従事する医師や看護師たちの奮闘と彼らを取り巻く日常を描いたドラマである。人間ドラマではあるが、かなり「救命医療の現場」を忠実に描写し、医学的視点や臨床倫理的見地からも情報発信や問題提起する作品として、全米のみならず全世界で放映されている作品で、331話のエピソードがある。

DVDの中から、高橋教授が、Season 7 第19話の“Sailing Away”の4シーンを抜粋し、ドラマの英語のセリフ音声を全て文字に書き起こし、それが学生たちに配布される最初の資料となった。シーンは大きく分けて「車内での会話 (危機状況の勃発)」、「救急救命室での救命措置 (2幕分)」、「措置後のオフィスでの会話」の4幕であった。

このドラマが扱うテーマ上、必然的に疾患や臨床現場での救命措置が題材となり、オリジナルのテレビドラマでは、「毎秒ごと」と言っても過言でない頻度で病態の説明、医療行為、医

療機器の名称、医薬に係る専門用語、救命措置のフレーズなどがスラングや略語も交えて慌ただしく飛び交う。さらに、救命救急室での逼迫したシーンは、ネイティブ・スピーカーの対話のナチュラルスピードを上回る500~550wpmの発話速度で展開される。

3.4 テレビ・ドラマからパイリンガル・プレイへの転換

このシーンを舞台上演する学生たちにとって、テレビ・ドラマのセリフをそのまま文字起こした台本は、英語表現においても医療行為を含む動作にとっても高難度な題材であった。英語学習者用に書き下ろされた台本 (教材) ではない、authentic なオリジナル台本であるため、本読み段階から、英語の語彙や表現が難解であった。英語の医療専門用語や ER での医療行為は、国際教養学科生だけでなく医療薬学科の高学年にとっても馴染みがなく、「(最初は) セリフの内容理解どころか、患者がどのような状態なのか、何についてのやりとりなのかも理解できない状態からのスタートであった。」(受講生の省察レポートより。)

基本的に台本の解釈、舞台台本への転換、キャ

ストの分析 (character analysis) は、学生同士が主体的にチームを組み共同学習し、指導者である筆者と高橋教授が、それぞれ英語指導と医療に関する専門知識や医療行為の所作の指導をリハーサルの後半で実施した。

学生たちからは、このシナリオの舞台上演に関して、以下のような工夫策が第1回のミーティング後に提案され、それぞれの具現化に向けて作業が進められた。

- (1) DVD の日本語字幕も積極的に活用し内容の解釈と動作の確認を行う。
- (2) 聴衆にわかり易くするために、上演は日本語と英語のバイリンガルにする。
- (3) シーンの説明や展開を補助的に説明する役としてナレーター役を作る。
- (4) ナレーターとは別に総司会 (MC) を設け、ER の背景解説とバイリンガル・プレイについて上演冒頭に聴衆に説明する。
- (5) 専門用語や医学用語などの和訳を舞台上スクリーンに PowerPoint で視覚情報として聴衆に提示する。
- (6) 難解な医療用語や疾患の英語は極力わかり易い一般語や表現に置き換える。
- (7) 作成中の台本は、随時 Google ドライブにアップロードし、オンライン上で相互に編集する。
- (8) ER や車内のシーンは、スクリーンに写真を投影することで舞台背景を作る。

3.5 バイリンガル上演の台本作成

オリジナルのテレビ・ドラマのスク립ト (高橋教授作成) から英語の舞台上演の台本を作る作業から始まった。シーンごとに作業グループを割り当て、word で作成した台本のフォーマットを Google ドライブと LINE で共有し、そこに各自が書き込み、他グループと筆者がコメントする方法で期限を1週間と定めて作業を進めた。製作過程で、登場人物の特徴や動きに関する気づきも適宜メモし、別ファイルで共有することで、作品のイメージをメンバー全員が共有

することを目指した。クラウドや SNS でリアルタイムにどこからでも作業に加わることができる環境を作ること、2017年度の学芸学部ジョイント・プログラムから得たアイデアで、同じ時間に全員が集まれない教育環境の違いや、各メンバーの時間的制約を補填する手段として有効である。

英語の上演台本が一通り仕上がったら、登場人物を書き出し、キャストの割り当てを行った。その際、メンバー全員がセリフのあるキャストとして舞台上ることと、可能な限りキャストとしての負担に差が生じないことを目標に、セリフの置換やセリフ量の調整 (多いセリフをセリフの少ないキャストに振り分けたり、セリフの多い役をダブルキャストにするなど) を行った。また、聴衆が理解し易い舞台にするために、工夫策であった MC とナレーター3名 (各シーンの冒頭やつなぎ目、ストーリーの展開をフォローする語り部) を新たに配役し、対話の一部を解説に変換した。

配役が決定したのち、作業グループを組み替え、各キャストが自分の英語のセリフを和訳する形で、日本語台本の製作に移行した。慌ただしく展開する ER での怒涛の医療行為に伴う会話を、上手く日本語に訳すことは、DVD の日本語のサブタイトルを補助的に使っても困難な作業で、解らない所作や医療行為は、高橋教授に各チームが随時質問して指導を受けるというプロセスで理解を深め、和訳すると共に英語台本にも補正を加えていった。あくまでも英語での対話に忠実に和訳する場合、その言語が持つ特有の世界観とパラダイムが別言語のそれと合致させることは難しく (Sapir, 1983)、後述する聴衆からのコメントに見られるように、「日本語の舞台は所々不自然なセリフがあった」、「日本語よりも英語のほうが臨場感があり良かった」という指摘があったことも事実である。

完成した日英バイリンガル台本は、本読み、立ち稽古、リハーサルを繰り返す中で幾度となく、文言や会話文の修正が学生たち自身から提案され、議論され、聴衆に理解され易い表現に

加筆修正が為されていくと同時に、聴衆が内容を理解するために必須となる医療行為や専門用語については、スクリーンで補助情報としてその語句を英日対訳で提示した。背景も含めて PowerPoint 素材の製作や効果音の選定もリハーサルと同時進行で行い、また、ほとんどの学生が、キャストとスタッフ両方を掛け持ちした。

キャストは以下の通りである。

参考までに、舞台上演台本の Scene1の最初の部分のみ、以下に英日対訳台本を掲載しておく。セリフの下線部は、医療行為や専門用語(スラングを含む)に該当する表現である。2分に満たない短い冒頭部分だけを取り上げても、かなりの医療表現が含まれていることがわかる。例えば、「瞳孔の開きをチェック (= pupils are delated.)」したり、「気道を確保する (= keep throat open)」する行為であっても、「焦って話している」という設定でセリフを言いながら医療従事者が日頃行う所作を演じるのは、想像するよりも遥かに難しいものである。一つ一つの所作に伴うナチュラル・スピードでのセリフの掛け合いには、かなりのリハーサルが必要であったことを付け加えておく。

English Senario SCENE 1

Narrator (1) Abby, the nurse, found out that her mother Maggie from is shutting herself in her room. Dr. John, who is a friend of Abby, decided to pick her up and help with depressed Maggie. Maggie was suffering from her depression, and while her daughter was not watching, she took excessive amount of sleeping pills.

Abby Okay, Mom. We're here. Mom? Wake up. We have to go inside. Mom? Mom? Mom? John!

John What happened?

Abby She's not waking up.

John Maggie? Maggie, can you hear me? Maggie!

Abby Pupils are dilated.

John How much?

Abby About nine millimeters. Did she take something?

表4 キャストの割り当て

Drama Title :

Let's 救命!: Bilingual play of a scene from ER (抗ヒスタミン剤過量摂取者の救命)

Cast :	Scene 1 (Car)	Scene 2 (ER)	Scene 3 (ER)	Scene 4 (Office)
MC	Chisato			
Narrator	Kazane	Mei	Yuki	
Abby (nurse)	Arisa	Chinatsu	Konomi	Yuri
John (doctor)	Azusa	Nanako	Nanami	Aki
Maggie (mother)	Saeki (teacher)	Physico (doll)	Physico (doll)	
Haleh (nurse)		Misato		
Chuny (nurse)		Airi		
Luka (doctor)		Yuka	Rina	

John I don't know. Sit her up.
 Abby Did you see her take something?
 John No. She's tachy.
 Abby Oh, God!
 John Pulse is 130.
 Abby God!
 John I don't see any sign of head injury.
 Abby She took something.
 John Where'd she get it from?
 Abby Call the paramedics! What are you doing?
 John We can be there before they can get here. Come on, shut that door.
Keep her chin up. Keep her throat open.

日本語台本 SCENE 1

Narrator (1) 看護師のアビーは母マギーが部屋に引きこもっていると知らされます。アビーの友人で医師でもあるジョンと一緒にマギーを迎えに行くが、マギーはひどい鬱状態で、目を離れた際に睡眠薬を大量に飲み込んでしまいます。

Abby 着いたわよ。ママ？起きて。ママ？ママ？ジョン！
 John どうしたんだ！
 Abby 起きない！
 John マギーさん！マギーさん！聞こえますか？マギーさん！
 Abby 瞳孔が散大してる。
 John どのくらい？
 Abby 9ミリほど。何か飲んだの？
 John 分からない。とりあえず体を起こして。
 Abby 気づかなかった？
 John いや。脈拍数が異常だ。
 Abby どうしよう

John 脈拍は130だよ。
 Abby どうしよう。。。
 John 頭部損傷はなさそうだ。
 Abby 何か飲んだのよ。
 John じゃあ一体それはどこから手に入れたんだ！
 Abby 救急車を。はやく呼んで！
 John いや、僕らが先に行くほうが早いよ。さあ早く乗って、ドアを閉めて！
マギーさんの顎を上げて、気道を確保
してくれないか！

3.6 舞台装置、小道具、衣装について

本格的な演劇とは異なり、OCFでの語劇上演では、大道具や衣装については極力簡易化される傾向にあるが、本上演では、救命救急の切迫した医療場面と複雑な専門用語が飛び交うセリフ回しを聴衆に伝えるために、ビジュアル的にも特徴のある医療現場の象徴となりうる舞台装置や衣装が望まれた。幸運にも、本学薬学部と看護学部の協力により、医療訓練実習用のフィジカルアセスメントモデル(Physiko)、ストレッチャー、聴診器などを借用することができたこと、また衣装として白衣やナース服を借用できたことにより、医療現場をかなりリアルに演出することが可能となった。聴衆からのコメントでも、舞台上の機材や小道具が現場の「臨場感」や「リアル」を醸し出していたことがうかがえる。

3.7 聴衆のコメントからみたプロジェクトの気づき

本ドラマ上演を鑑賞後に聴衆が書いたコメント69件から一部引用する。

- ・ドラマのワンシーンを細かく演じており、英語でのやりとりはより緊張感が伝わりました。医学部で実際に使っている専門用語を交えながらの実演は見ごたえがありました。(N.S.)
- ・同じシーンを日本語と英語で演じていてストー

- リーが分かりやすくよかったです。実際の機器などを使っていて緊迫感がとても伝わりました。(Y.T.)
- ・日本語で最初に上演してくれたので内容がよく理解できた。専門用語なので難しい単語が多かったが実際の現場で行われる対話だと感じることができ臨場感があり勉強になりました。(M.T.)
 - ・医療用語も自然にセリフになっており驚きとともに練習の積み重ねだと拝察し、努力の成果を感じました。日本語版と英語版の両方をなさったことも効果的だったと思います。(N.K.)
 - ・まず何よりバイリンガル構成、専門用語の表示など、オーディエンスへの配慮が最高であった。早いテンポでの英語のやりとりや合間のナレーションも素晴らしい練習量でした。(T.F.)
 - ・新しい医療と言うジャンルで一気に会場の雰囲気切迫感に満ち、新鮮な発表でした。日本語と英語バージョンの二本立てで比較することができ言語が変わることでその雰囲気も全く異なったものになり興味深かったです。(A.T.)
 - ・医療現場を演じるのは本当に難しかったと思います。臨場感がすごかった。医療用語がバンバン出てくるので見ているこちら側も緊張した。バイリンガルで上演してくれたので内容がずっと入ってきた。全体的にあともう少し声のボリュームを上げるともっと良くなると思う。(K.K.)
 - ・医療用語を英語で聞くと言う機会が初めてで新鮮だった。いざと言う時に少しでもわかるように重要な医療用語だけでも覚えておく必要があると心から感じた。(Y.O.)
 - ・PowerPoint に医療単語が書かれているところがとてもわかりやすく大変テンポの速い臨場感のある演技だったが一人ひとりの滑舌がはっきりしていてよかった。
 - ・実際に医療現場で使うような機材が道具として用いられていて大変臨場感に満ちた上演だった。最初に日本語で演じてくれたので難しい単語や表現があっても英語でも理解しやすかった。
 - ・救命という難しいテーマでよく演技ができたと思った。(Y.N.)
 - ・セリフをよく覚えていてテンポが良かった。日本語のセリフの言い回しが字幕そのままのようで不自然に感じてしまう点があった。(K.K.)
 - ・使っている道具がリアルで素晴らしかった。(I.K.)
 - ・医療道具、音なども工夫されていて、本物の医療ドラマを見ているようだった。(Y.K.)
 - ・専門用語との戦いは大変だったと思います。それでも諦めずにやり切ったのはすごい。目の前でドラマを見ているみたいな感覚、それほどリアルでした。(M.S.)
 - ・機材や衣装が本格的で、内容が入ってき易かった。会話の仕方もリアルだった。(Y.Y.)
 - ・日本語と英語では雰囲気が違う感じがした。英語のほうが緊張感がよりあった。(E.M.)
 - ・赤いライトを動かしながら地面を照らし緊迫感を出すと言う発想がとてもいいなと思った。一人ひとりの動きが常にあり自然体であった。専門用語が多いため日本語から上演すると言う方法は適切だと思った。(S.O.)

- ・テレビドラマの再現というのは面白い発想だと思った。車の中の場面から ER への転換が工夫されていた。(A.K.)
- ・(Doshisha) Women's College of Liberal Arts guys made a lot of details in this complicated drama and they do twice both in Japanese and English, which was very effective and kind to the audience. (X.G.)
- ・You play the same critical situation both in Japanese and English which helped the audience understand and follow the story very well. With those real-life situation saving devices your performance was very powerful. We learned we should be thankful for those ER duties to save peoples' lives 24 hours a day. (K.N.)
- ・You performed the same scenes in Japanese and in English that was very interesting and we know exactly what was happening, also learned a lot of technical terms. Thank you so much for sharing. (M.M.)
- ・Good construction to understand difficult medical terms. Heart beating! Thrilling! Good sound effects. Using real medial equipments was also good. (H.O.)
- ・Everyone was so confident and I really admired it. I usually do not like watching these types of scenes but it was easy to understand and watch.(R.P.)
- ・There were a lot of difficult words and terms in this drama. So I thought their

idea which they play in Japanese and in English was awesome. (A.I.)

- ・All of your pronunciation were very beautiful! I can't believe that you didn't have much time to prepare. (A.K.)

上記のコメントから、「臨場感」、「緊迫感」、「リアル」という言葉が頻繁に使われ、複雑な医療ドラマを英語でかなりのスピード感を持って、所作も忠実に演じたことが高く評価されていたことがわかる。また、英語自体の難易度も聴衆には伝わったようであったが、英語パフォーマンスの場である OCF に於いて、敢えて日本語での上演を英語上演に先立ち披露しバイリンガル・プレイの形態をとったことで、聴衆にとっては内容が分かりやすく、英語や演技に集中して鑑賞できたことに結びついたと考察する。今回のバイリンガル上演企画が工夫策としての的を射ていたことの証明である。

演技やセリフ回しに対する称賛だけではなく、上演を通して ER の仕事に対する共感や「いざという時のために用語を覚えてく必要性を感じた」など、実際の社会生活に観劇で得た経験を落とし込み意識化している聴衆もいたことは、演者たちが上演を通して聴衆に知らせ (inform)、説得 (persuade) し、行動を促す (make them take an action) という社会変革を目指す演劇 (performance for social change, JACET OC 研究会, 2003) の域にこの上演が到達していたことを示唆するもので、嬉しい驚きであった。

舞台での大道具・小道具・衣装などが「リアル」であることも聴衆にかなりのインパクトと臨場感を与えたことがわかる。そして、日本語上演やスクリーンに専門用語の対訳を視覚的に提示したことなど、あくまでも聴衆ファーストで課題を発見し、上演を企画したことが会場との一体感にも繋がり、ひいては演者 (= 学生) の動機付けや達成感の高揚に繋がったと考察する。

3.8 振り返りレポートからみたプロジェクトの気づき

プロジェクトに参加した2学科17名の学生が上演直後に書いたコメントからは、学生たちの達成感と自己肯定感の高まりが観察できる。非日常的な学修環境で、一つの目標に向かって自律的に協働した成果を初対面の聴衆に披露し評価される成功体験は、さらなる学びへの動機付けとなり、また、難しい英語表現や authentic な発話を時間をかけて自分のものにし、メッセージとして自分たちが操作し切れたと感じた時の達成感も見て取れる。学生の振り返りレポート省察の一部を引用する。

- ・思ったより上手くできて良かった。リハーサルを直前に何度も繰り返すことで、体で覚えることができた。(H.O.)
- ・本番が近づくにつれ、表情までも内容に合わせて自然に出せるようになったので、練習の成果があったと思う。(Y.T.)
- ・薬学部では、このように英語を学ぶ機会がなければ、皆で一つのものを作り上げることもありません。とても緊張しましたが貴重な体験でした。(E.T.)
- ・大きなミス無しで成功できたと思います。他大学の学生や先生からの大きな拍手と歓声が嬉しかったです。先生方やスタッフの協力とチームワークに感謝。(K.T.)
- ・シリアスな内容だったが、英語表現の些細な部分まで何度も練習し、細かい演技を取り入れ、今回やり切れたことで自信ができました。(C.N.)

4 共同英語ドラマ制作・上演の意義 —考察—

4.1 共同学習がもたらす「自律性」

共同ドラマ制作プロジェクトの英語教育にお

ける意義の一つは、共同学習 (cooperative learning) にあると言える。学習者が自主的に行うグループでの共同学習は、今回の共同ドラマ制作のように、週1回の授業でのアクティブ・ラーニングだけでなく、数ヶ月の期間、必要に応じて集まり（もしくは、オンラインを通して意見交換やアイデアのシェアを継続することも含め）、Ryan & Deci (2017) が提唱する “Autonomy-supportive learning climates” を形成する。これがまさに、「学修コミュニティ」であり自律学修者 = autonomous learners を育成するプラットフォームなのである。そこには、Smith (1996) が定義する共同学習の5つの要素、すなわち、(1) positive interdependence, (2) face-to-face promotive interaction, (3) personal responsibility, (4) teamworking skills, (5) group processing (pp.75-76) が存在し、それらの有機作用によって質の高い学びが継続可能となる。

共同ドラマ制作のような、いわゆる PBL (Project/Problem Based Learning) における教員の役割は、発表に向けた準備の最初の段階では、プロジェクトの目的、内容、スケジュール概要等を学生に理解させリーダーシップをとることであるが、その後は必要に応じてガイダンスやアドバイスを与えるナビゲーター的な存在にシフトする。学生が自律的に目標に照準を合わせ積極的に研究や制作に取り組むようになると、むしろ過干渉から学生の自主・自律性を脅かさないよう注意して関わることで、「やる気」を鼓舞し、成果発表での学生の達成感や肯定感さらには高まりさらなる学びにつながる。このポジティブな学修スパイラルに学生たち自身が導くことが共同学習の醍醐味である。

ただし、難しい英語表現や、今回の場合であれば医学専門用語や医療行為に関する表現や動作のコツなどは、専門的な見地からの助言が必要とされる場合が多いので、スキル構築という観点からは教師のサポートがかなり最終段階まで必要となる。

4.2 「社会人基礎力」の鍛錬

共同ドラマ制作を通して、学生たちが得た英語の知識（語彙、表現、発音、流暢さなど）と発話力や読解力は、学修の事前事後で客観的に能力の測定は実施していないが、当然、英語力の向上に繋がったと推察できる。実際、PBLのようなアクティブ・ラーニングの学習効果については、グループワークと講義中心クラスの比較による杉山&辻（2014）の研究が証明している。

それに加えて、このドラマ制作の一連の学びは、上述したように協同的に達成され、かつ主体的に課題を見極め目標に向かって計画的に上演作品を創造していくPBLは、「社会人基礎力」構築の観点からも意義ある活動であると言える。

「社会人基礎力」とは、2006年に経済産業省が「職場や地域社会で多様な人々と仕事をしていくために必要な基礎的な力」として提唱した、俗にATTと呼ばれる3つの能力、すなわち、「前に踏み出す力（action）」、「考え抜く力（thinking）」、「チームで働く力（teamwork）」とそれを構成する12の能力要素のことである（表5）。近年では、この3つの能力12の能力要素に加えて、「目的（どう活躍するか）」、「学び（何を学ぶか）」、「統合（どのように学ぶか）」の3つの視点で振り返り（reflection）をすることでキャリアを切り開いていくことが必要とされている。

異なる教育背景を持つ学生によるドラマ上演に至る共同制作の過程は、チームで共同作業をすることが基本にあるだけでなく、実は、一つ一つの過程が、この「社会人基礎力」の発達を促す鍛錬の場となっている。発表までの限られた時間を有効に使うための手立てや計画を立てること、通じる英語のために必要なスキルを身につけること、聴衆にとって分かり易い演技を目指すこと、それに必要な映像や文字や音情報を発掘すること、それら全てが「課題発見力、計画力、想像力（考え抜く力）」を試す場となり、それをチームで共有し共に作ることは「働きかけ力、実行力（前に踏み出す力）」なしでは可

表5 「社会人基礎力」の能力要素

能力	要素
前に踏み出す力 (action)	主体性
	働きかけ力
	実行力
考え抜く力 (thinking)	課題発見力
	計画力
	創造力
チームで働く力 (teamwork)	発信力
	傾聴力
	柔軟性
	状況把握力
	規律性
	ストレスコントロール力

（出典 経済産業省資料）

能にならない。また、学部・学科が異なる学生がそれぞれのパラダイムを変換し新たな考え方を受容し視野を広げながら協働することは、まさに、「多様な経験、能力を組み合わせ統合する」力と「（自分がチームの中で）どう活躍するか」そして「何を学ぶか」を絶えず振り返り行動の決定をしていく作業に他ならない。それを成し得たからこそ、4.6、4.7で既述したような聴衆からの感動と称賛のコメントや達成感と肯定感に満ちた省察が得られるのであろう。JACET Oral Communication Special Interest Group（2018）が提唱した Social competencies through drama workshop で挙げられているドラマ活動が育てる9つの要素（9 significant items: motivation, assertiveness, persuasion, leadership, adaptability, stress-endurance, negotiation, logicity, problem-solving）がまさに「社会人基礎力」に合致することでも、共同ドラマ制作が英語コミュニケーション能力を鍛えるだけでなく、これからキャリアを切り開いていく学生たちが、この時代に必要とされる能力要素を意識的にそして潜在的にも鍛えるツールであることを示している。

4.3 英語（外国語）教育における新たな語劇

英語（外国語）教育に演劇を取り入れる手法は、近年、日本の高等学校や大学においても実践報告が多く、独自の発表会やコンテストを開催する大学も増加傾向にある。通常、外国語教育の現場で扱う語劇にはいくつかのジャンルがあり、ムーディ、浅野&野村（2019）は、聴衆とのコミュニケーションという視点から、古典文学からコンテンポラリーな現代劇まで既存の作品を再演する Scripted Drama と、社会問題やコミュニケーション・ギャップなど選択したテーマに沿ってシーンやセリフを全て創作する Creative Drama の2種類に大きく分類している。また、それらの伝統的演劇手法（conventional theatre）に加えて、「音読劇」、「朗読劇」、「読み聞かせ」などに邦訳されることの多い Readers Theatre や Oral Interpretation も学校英語教育で馴染みやすい活動として導入されることが多いジャンルである。さらに、参加者の発話力が試されるものとして、即興的にその場の状況から聴衆も巻き込んで場面を展開（improvise）していく Interactive Theatre（もしくは、Forum Theatre）も大学での実践報告がなされている。（Hirano, Shiozawa, Saeki & Yoshida, 2000）

今回の共同ドラマ制作で挑戦した演目では、アメリカのテレビドラマを、プロットには忠実性を保ったまま、舞台上演用に台本を転換し、台詞そのものや所作を含む舞台上でのやり取りを聴衆に理解され易いように修正を加えた。上述の Scripted Drama の範疇でありながらも、舞台上演用に MC や narrator を配役として加え、PowerPoint による視覚補助を活用するなど、Oral Interpretation と Creative Drama の要素も含むオリジナルな形式を作り上げた。第二言語／外国語としての英語学習者のために作られた教材ではなく、あくまでも authentic なテレビドラマ内の対話を聴衆を意識した舞台台本に変換する作業は、学習者の認知的能力を刺激する。自身が両言語で演じる想定で一つ一つのセリフや会話に意味づけし台本を製作すること

はメタ認知的能力を活性化させつつ英語学修を促す。また、選択した ER の題材は、認知症や救命という社会倫理的課題に取り組む活動であり、社会変革を起こす演劇活動（Performance for Social Change, Ethnographic Performance）（JACET OC 研, 2003, Shiozawa et al., 2013）としても意義あるプロジェクトである。英語と日本語の両言語でバイリンガル上演を実践するまでの学生の学びの過程は非常にユニークな新たな語劇の形態であったといえる。

5 今後の課題

「学修するコミュニティ」を具現化した今回のプロジェクトでは、1つの授業を複数の学科の学生全員が受講したのではなく、医療薬学科の5名は、「自発的に参加」という位置づけでの活動であった。今後の課題として、このような PBL は、正規の「授業」に据えない限り、すべての学生が同時時間帯に活動することが時間割上不可能に近いことが課題として挙げられる。今後、同様のプロジェクトを実施する場合は、「PBL 型の授業」として、物理的に学びの時間帯をどの学科に所属している学生でも確保できることが必須である。また、各学科によって、一定期間の実習が入ることが想定されるので、その期間なども考慮に入れる必要がある。「授業」として時間が確保できる場合でも、PBL の場合、事前事後学修（自律的学修時間）が多くなることは予想されるので、補助的にオンラインでの学修プラットフォームを大学として常時提供し、学生が活用することを推奨する。

このプロジェクトでは、学科によりプロジェクトの位置づけが上述のように異なっていたこともあり、人数的にもバランスを欠いていた。学科・学年別に作業できる時間帯がほぼ決まっていたことから、グループ・リハーサル（＝同じシーンに登場するキャストが集まって練習する場）のことを考慮して医療薬学科1年のメンバーを敢えて同じシーンに登場する配役にした。結果としてリハーサル時間は確保できたが、苦肉の策であったことは否めない。

学部・学科・ひいては学年横断のこのようなPBL型の授業が上手く機能するためには、英語（外国語）教育のみならず、学科が異なっても共通の練習時間や作業時間がより多く確保できる仕組みを創意工夫することが望ましく、そうすることで、学科を超えた学生同士のインターアクションがさらに活発に起こると考える。

指導する複数の教員にとってのホームは当然、所属する学科であるが、このような学科横断PBLの場合は、今後さらに他学科のカリキュラムにも触れ、他学科のスタッフと協働することが教職員レベルでも増えることが想定される（佐伯、2018）。各学部・学科で常識とされる考え方に互いに刺激を与え合い思考の幅を広げる異文化交流をダイナミックに起こす意識と仕組みが必要であり、全学的な視点で今後の課題と捉えることが必要である。

6 まとめ

本稿では、研究プロジェクトの一環として、国際教養学科と医療薬学科の学生が協働して英語によるドラマ制作に取り組み、成果発表として他大学の聴衆を前に舞台発表を披露したPBLについて報告し、その意義と課題について言及した。学部・学科を超えた共同ドラマ制作及び上演に至るまでの学修は、コミュニケーション重視型の英語学習を実現させるにとどまらず、「社会人基礎力」の育成と鍛錬の絶好の機会でもあることが示唆された。と同時に、異なるカリキュラムを有する学部・学科の学生が協働するためには、授業の企画や運用に関して課題は多く、運用に関しては創意工夫が必要である。この英語ドラマ制作プロジェクトの実践と省察が、本学の共通英語教育の発展とイノベーションに多少なりとも寄与することを祈り結びとする。

参考文献

Hirano, M., Shiozawa, Y., Saeki, N., & Yoshida, M. (2000). *Interactive Theatre and Its Application to English as a Foreign*

Language. 大学英語教育学会紀要 (31), 1-19.
飯田毅、成橋和正、橋本秀実、今井由美子、佐伯林規江、高橋玲、若本夏美、松中みどり (2018). 「本学の教育理念及び Vision 150を活かした共通英語教育開発のための基礎研究—1年目のまとめと考察」同志社女子大学総合文化研究所紀要第35巻、45-81.

JACET オーラル・コミュニケーション研究会 (2003). 「オーラル・コミュニケーションの理論と実践」三修社.

JACET Oral Communication Special Interest Group. (2018). Poster Presentation. The Japan Association of Applied Linguistics in JACET The 1st Conference. Takachiho University.

経済産業省中小企業庁 (2018). 「我が国産業における人材力強化に向けた研究会」(人材力研究会) 報告書.

https://www.meti.go.jp/report/whitepaper/data/pdf/20180319001_1.pdf

小林由利子 (2010). 「やってみよう！アブライドドラマ」図書文化社.

ムーディ美穂、浅野享三、野村和宏 (2019). 「表現力と「聴衆」の存在—コミュニケーション能力を高める舞台発表の可能性—」名古屋外国語大学論集第5号、247-281.

Nakamura, H., Nomura, K. & Saeki, N. (2020). *An acoustic study of communication apprehension during English oral presentations by Japanese university students*. *English Language Teaching*, 13(8), 178-184.

Ryan, R. M. & Deci, E. (2017). *Self-Determination theory: Basic psychological needs in motivation, development, and wellness*. New York: The Guilford Press.

佐伯林規江 (2018). 「学芸学部ジョイント・プロジェクトとしてのミュージカル・プロダクション—“学科ジョイント”効果と課題—」第4回学芸学部FD研究会配布資料.

Sapir, E. (1983). David G. Mandelbaum (ed.), *Selected Writings of Edward Sapir in*

Language, Culture, and Personality,
University of California Press.

塩沢泰子、野村和宏、大川道代、原口友子、ホーランド萬理子、ムーディ美穂、佐伯林規江 (2013). 「オーラルコミュニケーションの新しい地平」文教大学出版.
杉山成、辻義人 (2014). 「アクティブラーニングの

学習効果に関する検証—グループワーク中心クラスと講義中心クラスの比較による—」小樽商科大学人文研究127, 61-74.

高橋玲 (2021). 「学際的英語教育方法の実践的考察」同志社女子大学総合文化研究所紀要第38巻、5-8.
Via, R. A. (1976). *English in three acts*. The University Press of Hawaii.